



〈一冊の本〉

ぼくの命は言葉とともにある 福島 智 知出版社

2015年5月

本体1,600円 (税抜)



本研究所研究員
山田 美幸
(図書館情報学)

implication

私の大学時代。恩師に研究のために「読め」と渡された洋書。我がなけなしの英語力／日本語力だけを頼りに、逐次訳を進めていく中で、翻訳にもっとも苦労した単語がこの単語だった。辞書を引けば、「2. 言外の意味、含蓄、含意、含み」と出てくる。またしてもなんのこっちゃである。20数年前の私は「表現された言葉の文脈」を無視して、「表面のメッセージ」だけが、コミュニケーション上必要だとしか考えていなかったから。

言葉のおかげで、人間は誰かと繋がることのできるし、孤独にもなる。著者である福島智氏は、自ら置かれた「盲ろう」という状態を「静かなる戦場」、「戦闘状態」と例え、文を進める。福島氏は指字という手段を得て、自らの外界とコミュニケーションし、「自分世界の中にいる (本書p.28)」という実感を得たとある。そして、著者の人生を支える言葉を自身の体験を交えながら紹介していく。

言葉とは、単独でその存在を成し得るのであろうか。著者は、文脈や関係性の重要性を自らの体験を通して、こう指摘する。「一定の意味を運ぶ記号が言葉ですが、記号としての言葉それ自体はバラバラに分解されたパー

ツにすぎないのです。文脈や関係性の中で、他のパーツ (言葉) と複雑につながることによって初めて意味を成していくものだと思います。(本書p.92)」

読書という行為はどこかで限界はあるのかもしれない。人間は読書だけで賢くなれるわけではないし、体験しただけでは体験した事柄の素晴らしさを他者に伝えることができない。個人的には、「書物万歳、読書礼賛」的な文章を疑ってしまう。Webサイト上であっても優れた文章はたくさんあるし、紙に記された文章でもじっくり来ない文章も存在する。「読書万歳！」な頭でっかちだった大学生は、酸いも甘いもそれなりに人生経験を重ねてきた。経験することの食わず嫌いは、少しだけ無くなったのかもしれない。

最後に。拙文を記すにあたって辞書を引いた。しかも、間違えて。

implementation

プログラミングや情報処理でいうところの、実行、具体化、実現。皆様はこの駄文をお読みの後は、本書を「読む」という行為を実行していただきたい。

